

## 平成 26 年度 【 学園研究費助成金 &lt; B &gt; 】 研究成果報告書

学部名 文化情報学部

フリガナ アベ ジュンイチロウ  
氏名 阿部 純一郎

研究期間 平成 26 年度

研究課題名 地域・産業界との連携を通じた観光教育プログラムの開発  
: 世界遺産・小笠原諸島を素材にして

## 研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	阿部純一郎	文化情報学部	准教授
研究分担者			
研究分担者			

## 1. 本研究開始の背景や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

バブル期の行き過ぎたリゾート開発への反省から、日本でも「持続可能な観光」への転換が模索されているが、富士山の入山料徴収をめぐる観光業界と自然保護団体の対立に見られるように、「観光振興」と「環境保全」を両立させることは容易ではない。本研究の目的は、世界自然遺産・小笠原諸島を事例に、観光振興と環境保全の両立について体験的に学ぶプログラムを開発することにある。特に小笠原は、日本で最初に「エコツーリズム」を始めた先進地域であり、近年では外来種（ノネコ）を殺処分しないという世界的にも例をみない世界遺産マネジメントに取り組んでいる。本研究では、学部の観光教育の一環として、現地でのエコツアー体験と、外来種対策に取り組む小笠原自然文化研究所へのヒアリングを実施し、「観光資源の持続可能性」に向けて観光産業・行政・研究機関・住民がどのように連携しているかを調査した。

## 2. 研究方法等 (300 字程度で記述)

文化情報学部の観光関連科目の受講生から参加者を募り、小笠原諸島・父島で 5 泊 6 日の研修合宿を実施した。研修前には計 2 回の勉強会を開催した。1 回目は根岸康弘氏（小笠原村観光局）から島の概要と観光資源の説明、渡航上の注意点についてレクチャーを受けた。2 回目はヒアリング対象者の堀越和夫氏（小笠原自然文化研究所）から提供された参考資料をもとに、エコツーリズムと外来種問題に関する勉強会を開催し、質問項目を作成した。現地では 5 つのプログラム（①小笠原自然文化研究所による外来種問題のレクチャー&「ネコ待合所」見学、②東平アカガシラカラスバトサンクチュアリでのエコツーリズム体験、③ナイトツアー体験、④南洋踊り保存会の皆さんと南洋踊り体験、⑤海洋ツアー体験）を実施した。後日、本研修の教育効果を把握するため、参加者全員に対してアンケート調査とインタビューを行なった。

### 3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

今回の研修には、研究代表者のゼミ生(3・4年生)を中心に、計11名の学生が参加した。5泊6日の長期間の合宿であり、参加費用(渡航費・宿泊費・食費等)も自己負担としたが、アンケート結果によると、日程が長い、参加費が高い、と考える学生は皆無だった。プログラムへの満足度も、参加者の9割が5つの体験プログラムのすべてに「大変満足」「満足」と回答している。数名が一部のプログラムに「やや不満」と回答していたが、これはヒアリングの結果、船酔いやスケジュールの多忙さが理由であり、体験内容に関わるものではなかった。ただし、学生の健康管理には今後さらに細心の注意が必要だろう。

次に、満足度の高かった理由を考察すると、自然文化研究所へのヒアリング調査や「ネコ待合所」見学、自然保護区でのエコツアーやナイトツアーなど、現地ガイドや関係者のレクチャーを組み入れた企画ほど満足度も高かった。また学生によれば、これらはプライベートの旅行であればおそらく参加しなかったプログラムであり、地域の新たな魅力の発見につながったという。こうした現地関係者と連携した付加価値の高い体験を提供することが、学生の視野を観光だけでなく自然保護や外来種問題にも向けさせるうえで効果的といえるだろう。さらに、本研修ではできるかぎり現地住民と交流する機会を設けたが、これも一般の観光地ではできない体験として、学生には非常に好評であった。そうした交流はまた、学生が島民の生活や文化に関心をもつきっかけにもなったようである。なお参加者のうち2名は、その後も島のエコリズムと外来種問題について調査を継続し、卒業論文を執筆したことを付け加えておく。

最後に、今回の研修では事前勉強会から現地での旅程管理、各体験プログラムのレクチャー等において、小笠原村観光局、小笠原村産業観光課、小笠原自然文化研究所、南洋踊り保存会、小笠原ツーリストの皆様にご協力いただいた。こうした産学官連携による受入体制の基盤づくりが進んだ点も、今回の研修プログラムを通じて得られた成果の1つである。

### 4. キーワード (本研究のキーワードを1以上8以内で記載)

①観光教育	②観光人材育成	③体験型授業	④産学官連携
⑤世界遺産	⑥フィールドワーク	⑦外来種問題	⑧自然保護

**5. 研究成果及び今後の展望** (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

本研究では調査テーマを小笠原諸島の自然遺産マネジメントに置いたが、さらなる展開として小笠原の観光事業者や地域住民へのヒアリング調査、捕獲したノネコの受入先である東京獣医師会へのヒアリング調査も実施したいと考えている。また、移住者の島への来歴(ライフストーリー)をインタビューし、多様な移動民の往来のなかで形成されてきた小笠原独特の歴史・文化を描きだすような現地調査も、今後プログラムに組み込んでいきたい。

今回の調査によって明らかになった学生への教育効果やプログラム実施の問題点を踏まえ、次年度以降も継続的に小笠原諸島への調査合宿を行なうとともに、将来的には文化情報学部の長期の観光合宿プログラムとして組織化する計画である。なお、本研究のプログラム実施概要、小笠原自然文化研究所へのヒアリング調査結果、学生へのアンケート調査及びヒアリング調査の集計結果は報告書としてまとめ、公開する予定である。